

大学生参加型の「域学連携」まちづくり(3)

Student Community Development Activities by Community and University Collaboration (3)

舩 井 雄 一
Yuichi MASUI

1 はじめに

近年、大学生の汎用的な能力を高めるためにPBL（project based learning）を取り入れた授業を展開する取り組みが盛んに行われている。その取り組みでは、企業や地域が実際に抱えている課題などに対して大学生がグループになってその解決方法をまとめてプレゼンテーションを行うというケースが多い。また、それらの授業では学生が取り組むべき課題が企業や地域から提供されることが一般的であるが、各々の取り組みによって多くの学生たちが汎用的な能力を獲得するという一定の教育的成果をあげていると思われる。

平成30年度、國學院大學北海道短期大学部では全国まちづくりカレッジというまちづくりに関わる学生たちが一堂に集まる大型のイベントを主催する機会を得た。その機会を生かし、正課外の学生たちの自主的な課外活動として、全国から集まる学生たちにとって学びがあり、かつ楽しくもあるイベントを企画・運営するという課題を解決する取り組みを実践した。

そこで本論では、國學院大學北海道短期大学部が主催した「全国まちづくりカレッジin空知」の概要を示すこと、及び正課外で実施されたイベントを主催するというPBLの教育的な効果について検証する。特に教育的な効果の検証については、大学生の汎用的な能力の向上に着目し、社会人基礎力を利用する。本論はその目的を二つ有するため、イベントの概要とその教育的効果の検証の二部構成とする。

2 全国まちづくりカレッジin空知の概要

2-1. 全国まちづくりカレッジとは

全国まちづくりカレッジ（以下、まちカレ）とは、大学と市町村行政や商店街等との協働により、大学教育と地域社会を連動させ、まちづくり活動の学習や実践に結び付けようとしている大学関係者（学生や教職員）が集い、事例報告・ワークショップ・交流イベントなどのプログラムからなる全国規模での学生主体のフォーラムのことである¹。2002年に関西学

院大学で行われたのを契機に今まで17年にわたって23回行われている²。参加者数はその回ごとに異なるが、毎回100から200名程である。集まる諸団体の活動は、商店街の活性化、地域の特産品を用いたまちづくり活動など多岐にわたる。

地域活性化やまちづくりに関わる学生たちは、それぞれの地域で地域住民や各種団体と連携を図りながらその活動を行っているが、地域住民との関係、活動内容の認知向上、活動の継続性など多くの課題を抱えている。しかし、多くの場合、その活動は孤立してしまいがちで行き詰まりを見せることも少なくない。そのような中で、まちカレでは同じような悩みを持つ学生たちが一堂に会して話をするることにより、学生たちの活動に対するヒントが得られる、活動に対するモチベーションが非常に高まるなどの効果が得られる。

まちカレは、一般的な学会とは異なり、主催したいという意向を持った学生たちから依頼を受けた各大学の担当教職員が、教職員の集まりのなかで立候補し次の開催校を決める方式をとっている。ほとんどの大学では、予算獲得などの事務的な業務を除いて、その企画内容の立案から当日の運営に至るまでを学生たちが組織する実行委員会が主体となって準備する。およそ半年から一年にかけての長い期間、実行委員会の学生たちはまちカレの準備にその時間の多くを割くこととなる。そのため、まちカレに参加する学生たちはもちろん、主催する側の学生たちにも大きな教育的な成果を期待することができる。

2-2. 全国まちづくりカレッジと舩井ゼミとの関わり

まちカレと舩井ゼミとの関わりは、2015年2月に香川大学の直島地域活性化プロジェクトが主催した「第18回全国まちづくりカレッジin直島」がその始まりである。当時、江部乙地域での地域活性化活動の将来的な展開に苦労していた中、その存在を知り、まず教員だけでオブザーバーとして参加した。その結果、多くの大学生が多様な活動をしていることを知り、またそこにいる学生たちが非常にいきいきとしている様子を見て、学生たちに参加を促して新しい活動を考えるきっかけにしてほしいと考えるようになった。

そして、舩井ゼミでは2015年9月に岐阜経済大学のマイスター倶楽部が主催した「第19回全国まちづくりカレッジin大垣」からゼミ生が参加するようになった³。その後は、2016年10月開催、名古屋学院大学で行われた「第20回全国まちづくりカレッジin名古屋」、2017年

¹ まちカレの定義については、名古屋学院大学マイルポスの担当教員である水野晶夫教授のブログである「まちづくり活動記録（名古屋学院大学水野）」<https://milepost.exblog.jp/>から引用させていただいた。

² 回数の数え方については、まちカレを初めて主催する大学がブレ企画として行う「ブレまちカレ」を含む考え方と含まない考え方があがるが、本稿ではブレまちカレを含む考え方をとっている。

³ 詳しくは、舩井〔2016〕を参照されたい。

9月開催、京都文教大学で行われた「第21回全国まちづくりカレッジin宇治」、2018年2月開催、皇学館大学で行われた「第22回全国まちづくりカレッジin伊勢」に参加した。

第21回全国まちづくりカレッジin宇治に参加した際、学生たちから期間中に、このような素晴らしいイベントを自分たちの手でつくり上げることができたら素晴らしい、是非滝川市で実施したいという声があがり、ゼミの中で本格的に検討することになった。その後、後に実行委員会の中心メンバーとなる学生たちから次年度の夏の開催地に立候補したいという申し出を受けた。過去には短期大学が主催したことはなく、遠方の北海道が開催地となることで参加する学生が集まるかなど不安な要素が多くあったが、この学生たちの熱意があればまちカレの伝統を引き継ぎながら本学ならではのまちカレを実施できると確信し、開催地に立候補することとした。立候補した結果、開催地として認められ、第23回のまちカレにおいて初めての短期大学の主催、北海道開催に至ることとなった。

2-3. 第23回全国まちづくりカレッジin空知について

上記のような経緯から、「第23回全国まちづくりカレッジin空知」（以下まちカレ空知）が舩井ゼミの学生たちを中心とした実行委員会により2018年8月24日と25日に開催され、19団体129名（他大学：76名、本学：53名）の学生の参加を得られた⁴。

一日目には本学において、開会式、各団体の活動報告会、まちづくり活動を行うにあたって生じる課題を共有し解決するワークショップ、懇親会が行われた。活動報告会は4つの教室に分かれ、各団体が15分で普段行っているまちづくり活動について紹介した。また、まちづくり活動を行うにあたって生じる課題を共有し解決するワークショップについても①意見の出しやすい環境づくり、②一人ひとりのモチベーションの差について、③SNSでの上手な情報発信の仕方、④テーマなしの4つに分かれ、それぞれ90分ほど議論した。

二日目には、中空知の魅力を多くの大学生に知ってもらうこと、そして舩井ゼミが日常的に活動している場所やその内容について知ってもらうことを目的に滝川駅前の商店街、江部乙地域、砂川市、赤平市の4か所に分かれ、フィールドワークを行った。

①商店街フィールドワーク（滝川駅前商店街）

滝川駅前から広がる商店街は閉じたシャッターが目立つものの、様々な職人、商店街の歴史を受け継ぎ営業している商店主、そして舩井ゼミの学生などが商店街活性化に向けて積極

⁴ 岐阜経済大学、まちなか共同研究室マイスター倶楽部が参加予定であったが、前日の台風20号の影響により急遽参加できなくなってしまった。また、鹿児島県立短期大学、お茶会研究会も参加予定であったが参加できなくなった。

的に活動している。そこで、そうした商店街を歩き、地方都市が抱える課題と熱意を持って活動している人の軌跡が感じられるような謎解き要素を含んだまち歩きを企画した。また、舩井ゼミの学生が行っている「学生カフェ」を同時開催し、他大学の学生に活動内容を知ってもらうことを目的としたフィールドワークとした。

参加者は4～5人ごとにグループとなり、商店街を歩き、商店主に話を聞きながら謎を解き、商店街についての理解を深めた。また、フィールドワークの最後には、外部の視点からみた商店街の魅力ある素材とその活かし方を題材にグループで話し合いを行った。

②江部乙フィールドワーク

舩井ゼミでは、毎月JR江部乙駅舎を清掃しており、また同駅で行われている「駅カフェ」にも参加している。駅舎清掃は平成30年度で5年間、駅カフェも3年間続いており、舩井ゼミでも最も継続して行われている地域づくりの活動である。こうした活動の追体験、また江部乙で行われているフットパスを通じて江部乙地域の歴史を学び、北海道ならではの大自然を肌で感じてもらうためのフィールドワークを企画した。

参加者はJR江部乙駅を清掃し、その後ガイドの先導でフットパスを行い、地域住民が用意した地産地消の昼食をとった。さらに、現在江部乙で予定されている公共施設の機能統合についてのワークショップを開催した。

③砂川フィールドワーク

舩井ゼミでは砂川市における継続的な取り組みはないが、砂川市の地域おこし協力隊の活動拠点となっている「SuBaCo」での活動に参加してきた。「SuBaCo」は砂川市の地域おこし協力隊の活動拠点であり、また観光情報を提供する機能や地域住民同士がイベントなどを通じて交流できる場となっている。そこでの交流イベント等に参加してきたという縁もあり、同じ中空知の魅力として発信できる砂川市の「スイートロード」をめぐるフィールドワークを企画した。

砂川市の周辺は炭鉱地域であり、かつて炭鉱夫が肉体労働の疲れを癒すために甘いスイーツを好んだため、砂川市にはスイーツを提供する菓子店が多く存在する。その菓子店を用いた砂川のブランドづくりが「スイートロード」の取り組みである。こうした新しい取り組みや砂川市の持つ魅力を多くの大学生に知ってもらうことを目的にフィールドワークを行った。さらに、大学生との連携事業を模索し始めた砂川市が今後、大学生とどのような連携ができるかを検討するグループワークを行った。

④赤平・石狩川フィールドワーク

まちカレ空知が開催された2018年は奇しくも北海道命名150周年の記念の年であった。北海道と命名した松浦武四郎は北海道の内陸部を探検するにあたり石狩川を船で上ったという。そのことから石狩川にちなんだフィールドワークは出来ないかと考えた。また、滝川市は、石狩川と空知川という2つの大きな川が合流する地点であり、それらの川が存在がまちづくりに与えた影響は大きい。そこで、滝川市の「川の科学館」の協力を得て川とまちづくりをテーマに石狩川フィールドワークを企画した。

また、滝川市のある空知はかつて国内でも主要な産炭地の一つであり、滝川市も物流拠点や炭鉱夫たちが買い物を楽しむ商業地としてその恩恵を受けて発展した。空知は炭鉱地として栄えていた時期には人口も多く、大変な賑わいを見せていたという。しかし、炭鉱の閉山後、それを埋め合わせる産業を育成できなかったこともあり人口が著しく減少し、人口減少に伴う様々な地域課題が噴出している。このように空知、滝川のまちづくりは炭鉱との関わりが大きい。そのことを参加している大学生たちに体験的に理解してもらうために、滝川近郊にある「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」の協力を得て、立坑跡のガイドツアー、炭鉱とまちづくりについての講話などからなるフィールドワークを行った。

また、フィールドワークの最後には「川の科学館」にて、地元の人に愛着を持ってもらえる施設づくり、施設を運営するNPO法人等の後継者不足を如何に解消するかなどのテーマでグループワークを行った。

3 まちカレ主催による社会人基礎力向上に関する自己評価及び学業成績への影響

3-1. イベント開催というPBLによる教育的効果

ここからは、授業ではなく学生たちの自主的な正課外の活動として、全国から集まる学生たちにとって学びがあり、楽しくもあるイベントを企画・運営するという課題を解決するPBLが学生たちにとってどのような教育的効果があるのかについて検証する。まちカレの企画・運営という課題は他の一般的なPBLにおける課題とは異なり、企業などから与えられた課題ではなく、自ら設定した課題を解決するという特徴を持つ。そうした点で一般的なPBLとは異なる教育的効果があることも考えられる。PBLでは一般的に大学生の汎用的な能力を涵養することを目的としているため、ここでは大学生の汎用的な能力として一般的な社会人基礎力を用いることとする。

3-2. 先行研究

社会人基礎力とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力

(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省によって提起された概念である。「人生100年時代」,「第四次産業革命」の下でその重要性はさらに高まっているという⁵。

これまで社会人基礎力については様々な観点から研究が行われている。ここでは特に大学生の社会人基礎力向上に関する先行研究をみていくこととする。インターンシップを実施することによる社会人基礎力の向上効果について研究した真鍋(2010)では、インターンシップを「日常業務型」と「課題設定型」に分類したうえで、そのタイプによって伸長状況に差があること、特に「課題設定型」では主体性、実行力、課題発見力、発信力が有意に伸長していることを明らかにしている。百合井(2012)では卒業研究のために組成されたプロジェクトによるプロジェクトベース学習によって、「前に踏み出す力」,「考え抜く力」,「チームで働く力」の全てにおいてスキルが向上することを確かめている。また、山下・行實(2016)では、スポーツボランティアに参加することで、「主体性」,「働きかけ力」,「実行力」,「計画力」,「創造力」,「発信力」,「状況把握力」,「規律性」の8項目が有意に向上することを確認している。

(図表1) 社会人基礎力

前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場を理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

(出所) 経済産業省HPより筆者作成

⁵ 経済産業省「人生100年時代の社会人基礎力について」
http://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf

3-3. まちカレ実行委員会プロジェクトの概要

本実行委員会は、2018年度の夏季休暇中（8月24日・25日）に行われたまちカレ空知を実施するために発足した。メンバーは企画段階から当日の運営までを行うコアメンバーが33名、当日の運営を手伝うサブメンバー7名の総勢40名である。このコアメンバーを、フィールドワークを企画するチームが4つ、学内で行われた報告会やワークショップを担当したチームが1つ、学外への広報を担当した広報チームが1つ、それからこれらを統括する幹部チームが1つの合計7つのチームに分かれて企画・運営にあたった。

(1) 実行委員会のメンバー募集とチーム分け

2017年の11月に全学1年生の必修科目である「教養総合」という授業において、まちカレの概要説明と第1回目のメンバーの募集を行った。また、年度が変わった2018年の4月にも同様に「教養総合」の授業にて1年生をコアメンバーに加えるべく第2回目のメンバー募集を行った。それらの結果33名のコアメンバーが集まり、実行委員会が結成された。グループ分けは、それぞれのメンバーから希望を聞き、人数に差が出ないように調整を行って決定した。このチーム分けが行われたのが4月末であり、そこから開催日となる8月24日まで約4か月間をかけて準備を行った。

(2) 実行委員会の運営方法

実行委員会の運営方法としては、各チームの進捗報告、課題の解決を目的として、毎週水曜日に全てのコアメンバーを集めて「定例会」を実施した。また、フィールドワークを企画する4つのチームは週に一度、チーム内の定例会を行っていた。また、授業時間外にフィールドワークの対象となる場所に出向き調査等を行っている。フィールドワークの対象となる地域に出向いた際にはそれぞれの地域で活性化のために活動をしている地域住民や、その地域で事業を行っている人との打ち合わせも行い、それらの結果等については全体の定例会にて報告した。

さらにまちカレ空知の実施日前の8月13日から23日までは全てのチームが集まり、実施に向けての最終準備を行った。

3-4. アンケート調査の概要

上記のような企画準備、及び当日の運営を通して学生にはどのような成長がみられたのかについてアンケート調査を実施した。アンケートで確認した内容としては社会人基礎力がどの程度伸長したのかという点、及び成績に変化があるのかを確認するためにGPAを用いた

比較調査を行った。

(1) 時期

アンケートはまちカレ空知実施後の10月11日(木)に実施した。

(2) 対象

アンケートは、本学総合教養学科の2年生を対象とした。実行委員会のコアメンバー25名(「まちカレ」)と比較の対照群として実行委員会に入っていない2年生の55名(「非まちカレ」)が調査対象である。コアメンバーには1年生も入っていたが、1年次のGPAとの比較を行いたかったこと、また、実行委員会を経験したこと以外の結果への影響を最小化することを目的に調査対象を総合教養学科の2年生に限定した。

(3) 調査方法

まず社会人基礎力についてのアンケートを作成し、その回答を用いて定量的な分析を行う。測定方法は一つの社会人基礎力について3問設定することによって全部で36問の評価アンケートを作成した。各設問は、社会人基礎力が発揮された行動例をレベル別に5段階で提示し、自分の行動がどのレベルかを自己採点させた。1段階目が最も否定的な行動レベル(「できない」)であり、5段階目が最も卓越した行動レベル(「できる」)の5段階を設定した。

上記の質問項目を今年度の始まった4月時点とまちカレ空知が終了した後時点(10月)の2時点の自己評価をさせた。そして、4月時点とアンケート回答時点の2時点における自己評価を比較し、その差を社会人基礎力の成長値として計測する。なお、この調査は自己評価形式をとっているため、あくまでも本人たちの実感値であり、実際に社会人基礎力が伸長しているかどうかについて評価することは難しいという限界があることを指摘しておく。

3-5. アンケート調査の結果

アンケートの結果は以下のとおりである。

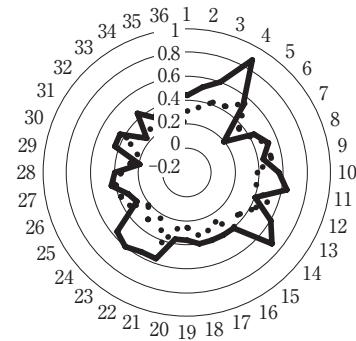
①社会人基礎力に関する36問の成長値の結果概要

社会人基礎力基礎力を構成する12の項目に対して3つずつ設定した合計36問の成長値を比較すると、全36問中29項目においてまちカレ実行委員会メンバーの成長値の方が高かった。概ね、まちカレ実行委員会メンバーの方が社会人基礎力についてより成長していると実感し

ている。

(図表 2) 社会人基礎力についての36問の成長値の結果

—— まちカレ 非まちカレ



②社会人基礎力12項目及びGPAについての成長値の結果

(図表 3) 社会人基礎力の能力要素及びGPAにおける成長度の差異

	前に踏み出す力			考え抜く力			チームで働く力						成績
	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレスコントロール力	GPA
まちカレ	1.56	1.6	1.40	1.60	1.72	1.20	1.28	1.72	1.04	1.04	1.12	1.28	0.46
非まちカレ	1.07	1.35	1.42	1.27	1.16	0.91	0.95	0.76	1.12	0.85	0.90	0.29	0.20
t値	1.04	0.51	0.03	0.80	1.45	0.60	0.98	2.28	0.22	0.47	0.67	2.29	1.95
p値	0.30	0.60	0.96	0.42	0.15	0.54	0.32	0.03	0.82	0.64	0.50	0.02	0.06

ここでは、社会人基礎力の能力要素における成長度の差異を分析する。全12項目のうち、10項目においてまちカレ実行委員の成長度の方が高かった。概ね、まちカレ実行委員の方が自己の成長を実感していると言える。特に「傾聴力」と「ストレスコントロール力」については有意水準5%でその差異が認められた。

③「前に踏み出す力」に関する項目

「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」の3項目からなる「前に踏み出す力」であるが、「主体性」、「働きかけ力」こそ非まちカレよりも自己評価は高かったものの、その差は有意差を示すほどではなかった。

まちカレは学生たちが自ら企画・運営し、遠方から楽しみに参加する学生も多く途中で投

げ出すことはできない。従って、特に主体性や実行力などの「前に踏み出す力」の向上についての教育効果について期待された。しかし、その結果は有意差が見られるほどではなかった。これはどういうことであろうか。高良・金城（2001）では、「インターンシップを通して、自己の未熟さや考えの甘さを突きつけられることによって、自己の現状についてのより厳密な内省が行われることになり、事後得点の上昇が生じなかったとも考えられる」と述べている。つまり、まちカレを主催するにあたっては、住民と協働していく必要があるが、住民は常に学生の目線に合わせるわけではなく、学生に対しては社会一般における水準を要求しながらともに作業を行っていくことが多かった。また、担当した教員も学生たちの考えを一段階レベルアップさせることを求め続けた。その結果、まちカレを主催した学生たちは高い難易度の課題に常に直面したことや、主体性の高い一般の社会人が自らの比較対象になったことから自分に厳しい自己評価がなされたと考えることができる。

④「考え抜く力」に関する項目

「課題発見力」、「計画力」、「創造力」の3つの項目からなる「考え抜く力」であるが、これらはいずれも非まちカレよりも自己評価は高かったものの、その差異は有意なものではなかった。しかし、「計画力」は4月と10月との間の成長値が最も高い項目であった。学生たちは、毎週行われた定例会にて週次の計画とその実績について報告することが求められていた。そうしたプロセスを通じて計画と進捗の違いや、それらを意識して行動する必要性について学んだと思われる。

⑤「チームで働く力」に関する項目

「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」の6項目からなる「チームで働く力」であるが、この「チームで働く力」が最も差異が大きくなった項目となった。特に、「傾聴力」と「ストレスコントロール力」については5%水準で有意となっている。

「傾聴力」については、学生たちが地域でのフィールドワークを企画する際に地域住民とのすり合わせの結果、自己評価を高めたと考えている。学生たちは、各地域で自らやってみようという企画のアイデアを持っていたが、それらをそのまま実行させてもらうことはなかなか出来なかった。そこでは、学生のやりたい企画と地域住民の考え方に違いがあり、その相違については話し合いを通じて解消していくことが求められた。このようなプロセスの中で学生たちの傾聴力に対する自己評価が高まったものと考えられる。

「ストレスコントロール力」の大きな成長も見られた。先述したように、学生たちは地域

住民や担当の教員から高水準の課題を解決することを求め続けられた。学生たちにとって約4か月間という期間は長く、また、学生間の人間関係、地域住民とのやり取り、担当教員からの期待やプレッシャーなど多くのストレス発生源があった。多くのストレスがかかっていたことは容易に想像できる。しかし、イベントの開催日まで途中で投げ出すことのできない状況で、短期的にではなく長期的な成果を生み出すために学生一人ひとりがストレスへの対処方法を身につけたと思われる。また、「ストレスコントロール力」については4月当初の自己評価が低かったという特徴をあげることができる。地域住民や担当教員といった年齢や価値観の異なる他者と深く関わることに對してのストレスがあったと思われる。しかし、最終的にはそうしたストレスを乗り越えてまちカレを実施することができたことからその対処についても自信を深めたものと考えられる。

⑥GPAの成長値について

本研究では、上述したような長期的な準備が必要となるイベントの企画に参加することで社会人基礎力の向上が見られるか否かについて主な関心をもって見てきた。そこで、もし社会人基礎力の向上が見られるならば、そこで涵養された能力が学業成績に良い影響を与える可能性はあるのか、あるいはこうしたイベントの企画は学生の本分である勉学の時間を奪うことで学業成績にマイナスの影響を与えるのかについても検証したい。

GPA比較の対象としたのは、本学総合教養学科の2年生で、実行委員会のコアメンバー25名（「まちカレ」）と比較の対照群として実行委員会に入っていない2年生の55名（「非まちカレ」）である。比較した成績は一年次通年のGPAと二年次の前期のGPAである。

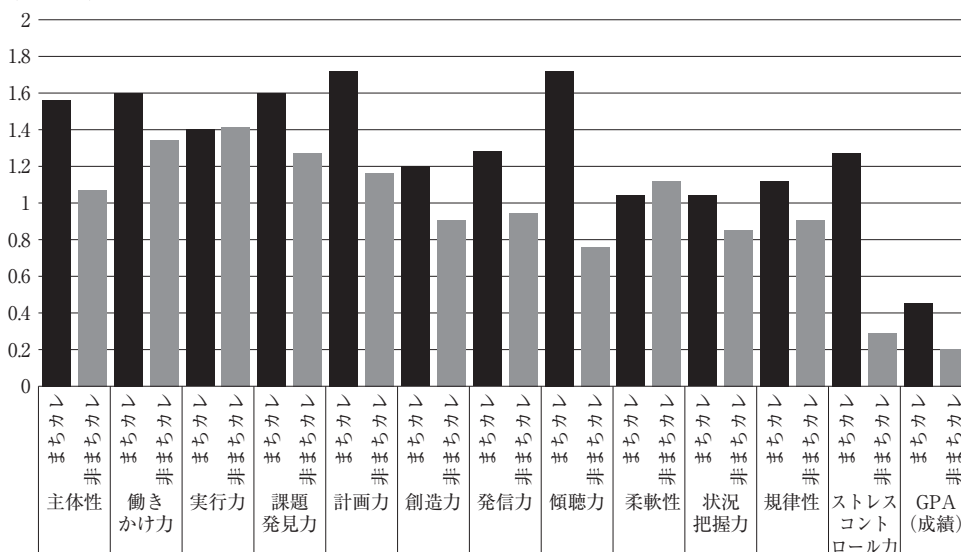
調査の結果は、まちカレ実行員のGPAの成長値の方が大きく、その差異は10%水準で有意であった。同じ学科の2年生同士での比較であり、まちカレ実行委員会としての経験以外の部分には大きな差がないとするとまちカレ実行委員会としての活動の結果がGPAの成長に寄与したものと考えられる。

まちカレ実行委員会メンバーは、週に一度、全体の定例会と各チームの定例会に参加するほか、授業の空き時間や週末などの時間を用いて地域住民とのミーティングや現地視察を行うなど多くの時間をその準備に割く必要があった。特に、アルバイトを行う学生も多く、チームメンバーや地域住民と会わせられる時間帯は貴重であり、他の人に合わせられる時間はミーティングなどに優先的に充てられる。そうすると授業の課題や自主的な学習は、ミーティングの時間や授業などとの隙間時間をうまく活用して行うほかはない。そのため、あらゆる勉強についても計画的に行う習慣が身に付き、その結果として成績が上昇したのではないと思われる。

また、実行委員会メンバーの中には、実行委員会の仕事をする事で成績が下がったと言われたくないという趣旨の発言をしているものもいた。大きなイベントを企画するのにふさわしい自己でありたいという高い意識が勉学にも向けられたことも大きいのではないかと。時間が無くなったことによって、今までゲームや動画視聴などに使っていた時間を勉強に振り向けることで勉強時間を確保したとも考えられる。

いずれにしても大型のイベントを企画することによって成績も向上する理由については、更なる調査や考察が必要であり、今後の課題となろう。

(図表 4) 社会人基礎力の12要素及びGPAの成長値の比較



4 まとめと課題

ここまでまちカレ空知の概要についての報告、及びまちカレ空知の企画・運営という他者から与えられる課題ではなく、自ら設定した課題を解決するというPBLの教育的な成果について報告してきた。

その中では、まちカレ空知の企画・運営という経験を通じて学生たちは社会人基礎力についての自己評価が高まることが明らかとなった。多くの項目において自己評価が高まっていることが確認できたが、特に「傾聴力」、「ストレスコントロール力」については5%水準で有意な差があり、明らかな成長値の増加がみられた。

正課のPBLを用いた授業によって社会人基礎力が向上することは多くの研究によって明らかになってきたことであるが、こうした正課の授業外の活動においても社会人基礎力が向上

することが明らかになった。大学における学生の育成については、正課の授業はもちろん、それ以外にも様々な取り組みに学生を巻き込むことによって学生の社会人基礎力が高まっていく。授業だけではなく、学生へ様々なプログラムを提示することが重要になると思われる。

ただ本研究にも課題が多くある。先述したことであるが、本研究における調査は自己評価形式をとっているため、本人たちの実感値であり、実際に社会人基礎力が伸長しているかどうかを客観的に測定しているわけではない。自己評価以外の評価方法を開発することが今後の課題となろう。また、もしこれらの取り組みによって社会人基礎力が向上したとしても、それがいつまで継続するのかは不明である。一度高まった社会人基礎力を低下させることなく、高め続けるためには正課の授業などとの組み合わせが必要となろう。こうした点についても今後の更なる研究が必要となる。しかし、本研究で明らかになったようにカリキュラム外の活動でも社会人基礎力が向上することが明らかになっている。大学の規模や教員の工数などを勘案し、カリキュラム内外の様々な取り組みを適切にミックスし学生の汎用能力が高められるよう努力をしていく必要があると思われる。

【参考文献】

- 経済産業省「人生100年時代の社会人基礎力について」 http://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf（最終閲覧日：2018年12月20日）
- 高良美樹，金城亮「インターンシップの経験が大学生の職業意識に及ぼす効果—職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として」琉球大学法文学部紀要人間科学，第8号，pp. 41-72，2001年.
- 舩井雄一「大学生参加型の「域学連携」まちづくり(1)」國學院大學北海道短期大学部紀要，第32号，pp. 1-16，2015年.
- 真鍋和博「インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」インターンシップ研究年報，第13号，pp. 9-17，2010年.
- 水野晶夫「全国まちづくりカレッジin空知（そらち）」まちづくり活動記録（名古屋学院大学水野）
<https://milepost.exblog.jp/m2018-08-01/>（最終閲覧日：2018年12月20日）
- 山下博武，行實鉄平「大学とJクラブの連携によるスポーツボランティア活動の評価：社会人基礎力に着目して」体育・スポーツ経営研究，第29号，pp. 1-16，201年.
- 百合井俊宏「PBL導入型卒業研究による社会人基礎力の育成」第60巻第5号，pp. 28-33，2012年

(参考資料—社会人基礎力アンケート)

■キャリアアサセーター・アンケート(社会人基礎力に関するアンケート)

以下の項目について、①4月当時の自分と②現在の自分を想定して、
 1:できない 2:どちらかといえ 3:ふつう 4:どちらかといえ 5:できる
 の5段階で自己評価してください。

3つの力	120の要素	定義	内容	①4月当時の自分のレベル	②現在のレベル
1 前に踏み出す力 (アクション) 一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組み力	主体性	物事に進んで取り組み力	1. あいさつを自分からすること 2. 自分なりに判断し、他のグループメンバーに話されずに行動できる 3. 自分がやるべきことをききとらえ、自発的に取り組みることができる 4. グループメンバー間で協力する必要性を伝える(説明)することができる 5. 状況に応じた言葉遣いを意識してグループメンバーの参加を促す発言ができる 6. グループ内の沈黙、馴れ馴れしい(あつれき)、混乱を解消する発言ができる 7. 小さな成果に喜びを感じ目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる 8. 失敗を恐れない、どこかへ行ってみようとする果敢さを持って、取り組みることができる 9. 強い意欲を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる 10. 自らの目標を明確にし、その実現のために現段階でやるべきことを把握できる 11. 目標に対しての現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる 12. 先生や先輩、友人などの助言を素直に受け止める、自分の課題とすることができる 13. やるべきことに対してそのプロセスを明確にし、優先順位をつけた現実性の高い計画を立案できる 14. 前向きな進捗状況の進捗に気を付けて物事を進めることができる 15. 計画の進捗状況により、計画を柔軟に修正できる 16. 自分のモデルとなる先輩を見つけている 17. なぜ? どうして? と気づくことができる 18. なぜ? どうして? と気づいたことについて、考え抜くことができる 19. セミやワークなどグループでの取り組みで、メンバーに情報をわかりやすく伝えることができる 20. メンバーがどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる 21. 自分の考えや意見を伝えることができる 22. あいづちや目を合わせること、相手に話しやすい状況を作ることができる 23. 内容の確認や質問などを行ないながら、相手の意見を正確に理解することができる 24. 相手の話を素直に聞くことができる 25. 自分の意見を持ちながら、人の意見も共感をもって受け入れることができる 26. 相手からそのように考えられるかを、相手の気持ちになろうと理解することができる 27. 立場や年齢の異なる相手の背景や事情を理解することができる 28. 自分と相手のこと、すべしこと、他の人に依頼すべきこと、相手の立場で考える 29. 周囲の状況(人関係、話し合いなど)を把握し行動をとることができる 30. 周囲に受け入れられるよう自分からコミュニケーションをとることができる 31. 身だしみや言葉遣いなどを適切に使い分けることができる 32. 提出期限や時間などのルール、約束、マナーを守る 33. 相手に迷惑をかけたとき、適切な対応をとることができる 34. 食事、睡眠など健康管理に気を付けてストレスを緩和できる 35. 人に相談したり、支援を仰ぐことによってストレスを軽減できる 36. 自分なりのストレス解消法を持っていて、ためこまないでいられる		
	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力			
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明確に計画し準備する力			
	粘り強さ	新しい価値を生み出す力			
	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力			
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力			
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力			
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力			
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力			
3 多様な人々とともに目標に向けて協力する力	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に 対応する力			

※このアンケート結果は、研究及び教育の改善に関する目的しか使用しません。また、授業をはじめとした何らかの評価等に用いることはありません。
 また、漏洩等が無いように厳重に取り扱います。素直に回答してくれると助かります。